

# 佛心

二〇二三年四月号

浄土真宗 本願寺派

トロント仏教会



きこえる仏さま

法話をするとき、よく「仏様はいつでもどこでも私たちのところに届いてくれる」というお話をさせていただきました。

いまは亡き人は、阿弥陀如来のおはたらきによって仏様と通らせていただき、南無阿弥陀仏の念仏を通して、私たちのところに至り届いてくれます。

このような話をサンデーサービスでいただいたに、あるご門徒さんから質問をいただきました。その方からは、「往生された人は、お盆のときにしかこの娑婆世界に帰ってこないのではなにか？」と尋ねられました。

たしかに他宗派では、そのような教えがあるかもしれません。真宗でもお盆の時期になれば、僧侶がお墓へ出向き、遺族と一緒に往生された方を偲んで法要を勤めます。

しかし浄土真宗では、お盆を通して亡き方を偲ぶだけではありません。その方をご縁として、私たちもまた阿弥陀如来の他力本願に出遇せていただいていたと、改めて気づかせていただく法縁でもあります。

その法縁との出遇いは、お盆だけではなくありません。さまざま縁が折り重なり、仏さまと出遇せていただくのです。

私が20代前半に大阪のお寺で法務員（他寺院所属の僧侶）をしていたときのことで。

月参りで御門徒さん宅を訪ねていると、そのご家庭の3代前後の娘さんが玄関まで出てきました。仏間には、その娘さんの両親が待つておりました。

蠟燭や香炉の準備もおわり、法要を始めようとしたが、娘さんの姿がそこにはありませんでした。娘さんを待っていると、その両親の方から「あの子は、宗教や仏教には無関心ですの、別室へ行ってしまうました。どうぞ始めてください。」と言われました。

無理矢理に仏事に参加させるのは気が引けたため、そのまま勤める月が続いていきました。

しかしある日、いつものようにその方のお宅に伺うと、無関心だと言われていた娘さんが仏間に入つてこられました。

月参りの法要が終わり、少しお茶をいただいたら、娘さんから突然「仏とは何ですか？」と聞かれました。いきなりのことで驚きましたが、「仏さまとは、さとりを開き、慈悲と智慧がそなわっている存在です。」と答えました。

すると彼女は、「慈悲と智慧って何ですか？」と聞いてきました。

私は先輩や先生から教わったことを思い出しながら、「私たちが悲しいときに、家族や友人は、私たちの側にいて、励ましてくれます。しかし仏さまは、私たちの側にいて、一緒に悲しん

でくれます。」と答えました。

それから彼女の質問は止まらず、私にとつても仏教を考えさせられる貴重な時間でした。

ただ、次の月参りへ伺う家もあつたので、お寺の住所だけ伝え、いつか遊びに来てください、と言ってその場をあとにしました。

それから幾日か経って、彼女がお寺まで足を運んでくれました。そこで彼女は、私が以前ご自宅へ伺った前の週に、実は親友を亡くされていたと教えてくれました。

彼女は、その親友がどこへ行ってしまったのかと疑問を抱くようになったそうです。

いろいろな書物を調べてみても、そこには「浄土」や「天国」などの言葉ばかりで、余計に分からなくなってしまう。そこで、私が月参りで伺った際に直接仏教について尋ねてみようと思っていたそうです。

お茶を出す暇もなく、彼女から「お浄土は本当にあるんですか？あるならばどこにあるんですか？」と聞かれました。

浄土の相や如来のおはたらきが、この眼で実際に見ることができたら、確かなモノとして、私たちは理解もしくは納得できるかもしれません。しかし、お浄土も如来のおはたらきも、この煩惱に覆われた眼ではその相を見ることはできません。

だからと言って、目に見えるものだけが本物として存在し、目に見えないものは偽物だとは、決して言えないはずです。

例えば、夜空に輝く星々は、昼間には見えずとも、同じように空に存在します。

風そのものの姿や形を、この目で捉えることはできません。しかし、木の葉や枝が揺れているのを見ると、室内からでも「風が吹いている」と分かります。

また、いまの季節の春そのものも、目には見えないものです。鳥のさえずりを聞いたり、温かい日差しを感じ、それらを縁として、私たちは春というものを認識します。

お浄土や如来のおはたらきもそれらに似ているような気がします。念仏は、この目で見ることができません。しかし、その念仏を通して如来のおはたらきを感じることはできます。

このことについて、ある先生が大変面白い例え話をしていました。

人間には、五感（視覚・嗅覚・触覚・味覚・聴覚）がある。阿弥陀如来は、私たちの耳にとどく、声の仏さま（きこえる仏さま）となられた。

もし阿弥陀如来が、におう仏さまだったら・・・。私たちはお慈悲を感じると、何かを匂わなければならぬ。ただそこで「南無阿弥陀仏」とは称えられない。なぜなら、声の仏さまではなく、匂いの仏さまになったから。

もし阿弥陀如来が、触れる仏さまだったら・・・。お慈悲を感じるたびに、手を洗いに行つて、何かを触らなければならぬ。農作業をしていて、手が汚れていると大変な手間をとってしまう。ただそこで、お慈悲を感じても「南無阿弥陀仏」とは称えられない。なぜなら、触る仏さまになったから。

もし阿弥陀如来が、味のする仏さまだったら・・・。皆、西本願寺に行つて、ご安置されている阿弥陀如来像に口付けをしなければならぬ。

そうすると報恩講のときなんて、親鸞聖人の像に何百何千もの人が口付けをしないと、その遺徳を感じられないのかもしれない。

以上の四感（視覚・嗅覚・触覚・味覚）は、どれもふとしたときに届くおはたらきにはなりません。

しかし、私たちの如来は、声の仏さまとなつて、いつでもどこでも、この私たちの口からそのおはたらきが、こぼれでてくれる仏さまとなられたのです。

ここで大事なものが、その「声に出す」や「聞こえる」というものが、物理的なものではないということですよ。

私は学生だったときに祖母を亡くしました。祖母は脳梗塞で倒れて以来、入院する日が続き、声を出すことができなくなりました。

数年後、祖母の容態が悪くなり、家族全員が病室までかけつけました。みなが病室で念仏を称えていると、危篤状態の祖母の口が少し動いていました。

弱りきった祖母の口から、念仏を聞き取ることはできませんでした。しかし、それは確かに祖母が、名号をとおしてころから如来のおはたらきに出遇せていただいている姿でした。

そのおはたらきは、祖母だけでなく、病室に集まっていた私をはじめ家族全員に至り届いて

いました。

これらのことを、お寺へ相談に来られた女性へお話ししました。すると、外は日が落ちてすつかり暗くなっていました。雲ひとつなかった夜空には、昼間に隠れていた星々がきれいに輝いていました。

彼女は、「もし親友が、私よりさきに亡くなっていなければ、私は死後のことについて、何ひとつ気にかげず生きていたかもしれないません。つらいことに変わりはありませんが、大切な縁として手を合わせてみます。」とおっしゃってくれました。

私たちは、亡き人を偲び合掌するとき、それを尊いご縁として仏さまにまた出遇わせていただきます。その如来の本願は、聞こえるおはたらきとなつて、いつでもどこでも私たちの側にいてくれる仏さまです。

トロント仏教会

駐在開教使 大内祐真

# 祥月法要のお知らせ

**2023年5月7日**

祥月法要とは、祥月命日（故人が往生された月のご命日）をご縁として仏法に遇い、阿弥陀さまの恩徳に報謝する思いでお勤めする法要です。

日時：2023年5月7日（英語：午前11時から）（日本語：午後1時から）

場所：トロント仏教会

**※英語法要のみZoom配信をさせていただきます。**

ZOOMでの参拝を希望される方は、その旨を<abc@abc.on.ca>までお知らせください。寺院事務所からzoom link を送らせていただきます。

故人が祥月でない方もご遠慮なくご参拝下さい。

※五月の祥月法要は、大内開教使の日本出張と重なっているため、ジェフ・ウィルソン先生(午前の英語)、ジョアン・湯浅先生(午後の日本語)が担当させていただきます。ご理解のほどよろしく願いいたします。

